



Data

監督: クァク・キョンテク / キム・テフン

出演: キム・ミョンミン / チェ・ミンホ / ミーガン・フォックス / キム・ソン Chol / キム・イングオン / ジョージ・イーズ

👁️👁️ みどころ

一触即発！スワ、北からの軍事侵攻か！コロナ騒動の真っ只中、金正恩の妹・金与正の登場によって朝鮮半島にはそんな緊張が走ったが、6月に入ると小康状態に。

そんな時期に公開されたのが本作だが、ノルマンディー上陸作戦や仁川上陸作戦（クロマイト作戦）は知っていても、長沙里上陸作戦を知っている日本人は少ないはず。若き神風特攻隊の悲劇やひめゆり部隊の悲劇は有名だが、本作の訓練期間わずか2週間、平均年齢17歳の学徒兵772名の運命は？

『戦火の中へ』が描いた「浦項（ポハン）女子中学」の戦闘が実話なら、本作も実話。日本人も、そんな実話からしっかり学びたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■長沙里上陸作戦とは？■□■

本作は韓国映画。したがって、「長沙里」は「チャンサリ」と読むわけだが、朝鮮戦争における序盤のハイライトとして有名なマッカーサー将軍の指揮による「仁川上陸作戦（クロマイト作戦）」は知っていても、「長沙里上陸作戦」を知っている人は少ないはず。ちなみに、上陸作戦としてもっとも有名なものは、「史上最大の作戦」と言われているノルマンディー上陸作戦だが、それに比べれば長沙里上陸作戦なんて屁みたいなもの・・・？

いやいや、そうは言っても、それは仁川上陸作戦を成功させるために不可欠な「陽動作戦」だったらいい。しかし、その作戦の可否は？成否は？また、その兵力と規模は？

それについては、チランの<STORY>をそのまま引用すれば次の通りだ。すなわち、

北朝鮮の猛攻を受け敗走を続けた韓国軍は、戦況を打開するためマッカーサー将軍の指揮下で大規模な上陸作戦を計画していた。それが後に伝説とも言われるクロマイト作戦（仁川上陸作戦）である。奇襲上陸をなんとしても成功させるべく、軍上層部は無謀とも言え

る陽動作戦を發動する。「長沙里（チャンサリ）に上陸せよ」と命じられたイ・ミョンジュン大尉らが率いるのは、訓練期間わずか2週間、平均年齢17歳の学生兵772人たち。使い古された武器とわずかな弾薬、そして最小限の食料だけを支給された彼らはまさに「捨て駒」だった。それでも祖国のため、愛する者たちを守るため、土砂降りのごとく降り注ぐ銃弾を受けながら、部隊は決死の上陸を試みる。

仁川上陸作戦が大成功したのは、歴史上の事実として有名。他方、その陽動作戦としての長沙里上陸作戦の成否は？

■□■あれも実話なら、これも実話！■□■

日本の戦国時代なら「関ヶ原の合戦」が、幕末から明治維新の時代なら「白虎隊の戦い」や「西南戦争」が有名。これらは日本人なら誰でも知っている戦いだ。しかし、今から約70年前の朝鮮戦争の際に起きた「長沙里上陸作戦」はもちろん、「浦項（ポハン）女子中学の戦闘」を知っている日本人は少ないはずだ。1950年8月11日に現実に起きたその「浦項（ポハン）女子中学の戦闘」を描いた感動的な戦争映画が『戦火の中へ』（10年）だった（『シネマ26』104頁）。

日本は戦後75年間続いてきた平和の中で完全に「平和ボケ」に陥っているが、去る6月16日に起きた南北連絡事務所爆破事件以降、朝鮮半島における南北関係は急速にキナ臭くなっている。1950年6月～1953年7月の朝鮮戦争が未だ終結しておらず、休戦状態にあるのも周知の通りだが、そんな韓国では『ブラザーフード』（04年）（『シネマ4』207頁）、『光州5・18』（07年）（『シネマ19』78頁）、『タクシー運転手～約束は海を越えて～』（17年）（『シネマ42』248頁）等の優れた戦争映画がたくさん作られている。

しかして、『戦火の中へ』が「浦項（ポハン）女子中学の戦闘」をテーマにした実話なら、本作は1950年9月15日の「長沙里上陸作戦」をテーマにした実話だ。そして、前者では、71名の学徒兵の平均年齢が16歳なら、本作では、772名の学生兵の平均年齢は17歳だ。平和はありがたいことだが、そのありがたみをちゃんと理解するためには、こんな映画から戦争の悲しさをしっかり体験する必要がある。

■□■美人従軍記者登場の可否は？■□■

エンタメ色一色で、何の主義・主張も見えない近時の邦画の中で、東京新聞の望月衣瑠子記者が書いた小説を原案として映画化した『新聞記者』（19年）は骨太の社会問題提起作だった（『シネマ45』24頁）。同作では、韓国人女優シム・ウンギョンが演じた、生まれは韓国、育ちはアメリカという多元的なアイデンティティを持つ吉岡記者が主人公として大活躍したが、本作ではアメリカ人の美人女性記者マーガレット・ヒギンズ（ミーガン・フォックス）がストーリーの牽引役として登場する。

彼女はニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の従軍記者として、学徒兵を指揮するイ・ミョンジュン大尉（キム・ミョンミン）に長沙里上陸作戦を命じた韓国軍の司令官に

直接取材することができたからすごい。しかし、将軍の言葉の端々から、この作戦は「捨て石作戦では？」と直感した彼女は、思わずそれを口にしてしまったから、その後の顛末は？

彼女はニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の取材記事で女性として初めてピューリッツァー賞を受賞した現実のキャラクターで、彼女の存在が本作を製作するインスピレーションになったそうだ。しかし、こんな美人記者を起用し、スクリーン上で「こんな議論」をさせたことの可否は？

■□■同じ民族が敵味方に分かれて戦う悲劇の重さは？■□■

アメリカでは5月25日にミネソタ州ミネアポリスで黒人男性が警察官に取り押さえられて暴行死した事件を契機として、一気に人種差別抗議デモが拡大している。その結果、「南北戦争」における南軍の英雄ロバート・E・リー将軍の銅像を引きずり倒す事件まで発生。そればかりか、北軍のリンカーン大統領までも、奴隷を所有していたとして非難されている。もともとアメリカは移民国家だが、それでも同じ民族が奴隷制度を巡って北と南に分かれて戦った悲劇は奥が深い。ましてや、朝鮮半島の朝鮮族は1つ。韓国映画ではそれが敵味方に分かれて戦う悲劇が強調されているが、それは当然だ。

しかして、本作ではイ・ミョンジュン大尉から分隊長に任命された学徒兵のソンプル(チェ・ミンホ)が、ある村で食料調達任務を遂行している時、北朝鮮軍と遭遇する中で少し年下のいとこと出会い、さまざまな悲劇が発生するストーリーが展開していくので、それに注目！

■□■なぜイ・ミョンジュン大尉が被告人に？■□■

『プライド・運命の瞬間くとき>』(98年)、『東京裁判』(83年)、『シネマ45』52頁で観るかぎり、A級戦犯東条英機の死刑はある意味当然だった。しかし、『明日への遺言』(07年)、『シネマ18』243頁)に見るB級戦犯の岡田資の死刑判決、『私は貝になりたい』(08年)、『シネマ21』208頁)に見るC級戦犯の清水豊松の死刑判決は理不尽だった。それと同じように、本作でもラストはイ・ミョンジュン大尉が被告人として裁かれているシーケンスになるのでアレレ……。イ・ミョンジュン大尉は長沙里上陸作戦で韓国軍のために大いに寄与したはずなのに、これは一体なぜ？

それは、長沙里上陸作戦に失敗し、多くの死傷者を出したことの責任を問われたためだろうが、それって理不尽なのでは？もともと、同裁判でイ・ミョンジュン大尉は自己の無罪や刑の軽減を訴えるのではなく、ドタバタ劇の中でろくな訓練も受けないまま、しかも軍人としてきちんと登録されないまま長沙里上陸作戦に従事し戦死してしまった多くの学徒兵たちが、軍人として死亡したことを記録してもらうことに執念を燃やしたらしい。

そんな裁判の結末を含めて、ノルマンディー上陸作戦とは全く異質な、こんな小さな史実に光を当てた本作から学ぶことも大きいはずだ。その結末も含めて、あなたは「長沙里上陸作戦」をどう考える？

2020(令和2)年7月7日記